

令和元年度 子ども未来応援会議 議事録 【要約】

日時：令和元年10月2日（水）13時30分～15時

場所：藤枝市役所3階会議室

主催：藤枝市教育委員会教育政策課

子ども未来応援会議は、「教育日本一のまち藤枝」を目指し、次代を担う子どもたちを健やかに育成するための教育環境の充実を総合的に推進するために組織され、学識経験者や教員、保護者、関係団体など17名の委員で構成されています。

今年度は、教育振興行動計画に基づき各課において各事業が実施されている状況を確認のうえで、教育振興基本計画に掲げる「学びの環境づくり」に必要な課題等について、多面的・包括的に意見・助言をいただきました。

発言者	発言内容等
委員長	<p>【委員長挨拶】</p> <p>この会で皆さんのご意見を承るということで、積極的な発言をいつものとおりお願いしたい。急に涼しくなり、こちらの方は皆さんもうクールビズをやめているが、今日は気楽に涼しくやりたい。議論は熱を込めて、姿は涼しくお願いしたい。教育の問題は実は今、大変換を迫られているのではないか。この一週間の間にいろいろなメディアの方から取材を受けた。今朝も取材の打ち合わせがあったが、皆さん関心があるのは、100歳時代の問題。100歳時代というのはどういう意味なのかというと、非常に難しい問題だとは思いますが、教育をもう一度考え直さないといけない。100歳まで生きるための今日ということになるので、これは、生涯教育の問題、学びなおし、人生のあり方の問題、生き方の問題、いろいろ関連している。この未来応援会議で議論されていることは、そういった中で大きな展望を開く道になる場合があるかもしれないと思っている。新しい時代がいよいよやってきて、皆さんの関心が高まっていると申し上げたかった。今日も積極的にプラス思考で良い提案ができるようにしたいと思うので、よろしくお願ひしたい。</p>
事務局	<p>【教育部長挨拶】</p> <p>本日は大変お忙しい中、お集まりいただき感謝申し上げます。また、日ごろ本市の教育行政について、ご理解、ご協力いただき、この場をかりて厚く御礼申し上げます。特に、この子ども未来応援会議では、平成23年度に設置して以来、これまでも本市の教育施策について、いろいろなご提言をいただいている。皆様のそれぞれの立場の中から広い視野、視点で多数のご意見をいただいていることに重ねてお礼申し上げます。</p> <p>ただいま委員長からお話があった少子高齢化。特に、高齢化が進んでいる状況であって、一方では、生産年齢、若い世代が減少している。人口も増えない、いわゆる人口減少の社会が到来した。また、グローバル化の進展やAIの導入など、絶え間ない技術革新も行われている。大きな社会の変革が来ていると感じる。その中で、少し視野が狭まる</p>

	<p>が、教育をめぐる環境についても、来年、小学校の学習指導要領が変わる。これは話題になっているので、皆さんもご存知かと思うが、小学校3年生から外国語活動が新しく入り、今まで実施していた小学校5、6年生の外国語活動が英語という教科に変わる。2年前からは、道徳も教科になったなど教育現場は大きな変革がきている。本市においても教育におけるICTの関係ということで、学校に設備を導入した。平成から令和に変わるこの時代の節目に大きな変化が起きていると感じる。それ以外にも、特別に支援が必要な子どもが増えていること、教員の多忙化の問題、よく言われる家庭の教育力の低下、大きな1つの最近の話題として、貧困による教育の格差、このような問題が山積みになっていて、本市も例外ではないのではないかと考える。教育委員会としては、こうした社会的な変化や課題に対応していけるように、他市町のモデルになるような「学びの環境モデルふじえだづくり」を進めることで、教育日本一に向けて、各課の事業推進を図っている。今日は、皆様方にご協議いただき、平成29年度に作成した藤枝市教育振興行動計画の後期計画の進捗状況を説明するとともに、皆様方からは、本市の教育について、幅広い視野から忌憚のないご意見、ご提言を伺い、今後の事業の遂行に反映させていきたいと考える。この会議については、本市が行う教育施策について必要とされる施策の提言、あるいは助言をいただける重要な外部有識者会議と捉えているので、本日も、多方面からのご意見をお寄せいただき、ぜひとも熱い議論になることを願っている。簡単ではあるが私からのあいさつとさせていただきます。</p>
<p>委員長</p>	<p>藤枝市教育振興行動計画 平成30年度実績及び令和元年度計画について、事務局から、資料の説明を求める。</p>
<p>事務局</p>	<p>藤枝市教育振興行動計画 後期計画においては、教育振興基本計画の3つの目標を中心とした施策体系により、27課室、199事業、このうち45事業が再掲であるので実際には154事業を掲載し、そのうち97事業においては、数値指標を定めて、施策の推進を図ってきた。</p> <p>資料については、施策ごと、昨年度までの実績と今年度計画の主なものを文章でまとめ、その中で「主な事業」を抽出し、事業内容の詳細を記載している。</p> <p>本来なら全施策についてご説明しなければいけないところだが、時間も限られているため、この会議で皆様からいただいたご意見をどのように活かしたかも含め、一部だが説明させていただきます。</p> <p>【目標Ⅰについて】</p> <p>目標Ⅰ『市民総がかりで子どもの未来を応援します』ということで、本計画の推進や、地域や家庭の教育力を高める事業が並んでいる。</p> <p>【施策1 教育に関する市民意識の醸成について】</p> <p>自治会やPTAによるあいさつ運動や見守り活動など、大人が子どもの模範となる様々な活動、また、子どもが安心して学べる学校づくりを推進するピア・サポート活動などを展開してきた。</p>

今後についても、基本計画の理念に基づき、市民総がかりで子どもの未来を応援するため、あいさつ運動や見守り活動を引き続き支援するとともに、各学校ではかなり浸透してきたピア・サポート活動の理念などについても、保護者や地域に効果的に浸透していくよう、市民への啓発、意識の醸成に力を入れたいと考えている。

【施策3 学校、交流センターを核に家庭・地域・学校等が一体となって取り組む教育の推進について】

学校サポーターズクラブ事業において、学校で行われる様々な活動に地域住民が自らの知識や技能を活かしてボランティアに参画する地域ぐるみの教育実践を行っている。昨年度は、地域と学校をつなぐ「地域学校協働活動推進員」間の連絡調整などを行う「統括コーディネーター」を配置し、地域ぐるみで子どもを育てる体制づくりを強化した。今年度も引き続き、「地域学校協働活動推進員」と、「統括コーディネーター」を継続配置するとともに、新たに「地域学校協働活動推進員」を対象に、「地域学校協働活動推進員」の仕組みや活動内容についての研修会を開催することで、これまでの取組をさらに発展させていく。

また、今年度より、瀬戸谷地区に続き、大洲、広幡地区で、小中一貫教育を開始するとともに、瀬戸谷地区を含む3地区でコミュニティ・スクールを導入し、「学校運営協議会」において、学校と保護者や地域が共に知恵を出し合い、学校運営に意見を反映させることで、協働しながら子どもたちの豊かな成長を支え、「地域とともにある学校づくり」を進めていく。3地区にはそれぞれ地域と学校をつなぐパイプ役としてコミュニティ・スクールディレクターを配置し、分野横断的な活動の総合調整など、統括的な立場で調整等を行い、「学校運営協議会」の円滑な運営に努めていく。

【施策4 安全・安心な環境づくりについて】

昨年度、高洲南小学校の事件を受け、地域住民の見守り隊やPTAのご協力により、登下校時の見守りを市内全域で強化して実施するとともに、昨年7月に藤枝警察署と共同で行った「子ども見守り安全宣言」に基づき、高洲南小学校には3台のカメラを設置した。

今年7月には、その他の全ての市立小中学校に防犯カメラを設置し、校舎側から通用門を含め学校敷地の外を撮影録画するとともに、カメラを設置している旨を示す表示サインを設けることで抑止効果を図っている。

さらに、夏場の高温による熱中症対策として、昨年度整備を開始した空調設備では、今年6月、市内の全小中学校の普通教室への設置が完了した。エアコンの使用にあたっては、「藤枝市立小中学校空調設備運用指針」を策定し、意欲的な学習が図れるよう活用するとともに、省エネや地球環境及び児童生徒の健康に配慮して、本指針に沿った適切な運用を今年6月より進めている。併せて、市内小中学校の体育館に、災害発生時の避難場所としての環境整備を図るため、スポットクーラーを各校4台ずつ設置した。

その他、IoT端末を利用し、子どもの位置情報をスマートフォンで確認できる見守りサービスを提供する事業者に対し、補助金を交付する事業を今年度から開始し、登下校時の子どもの安全確保について、環境整備の充実を図っている。

【目標Ⅱについて】

目標Ⅱは『一人ひとりの子どもに未来を生き抜く力を育てます』ということで、子どもの育ちを支援する事業について記載されている。

【施策5 地域の実態に合った特色ある教育を小中学校接続で推進について】

平成29年度より先行して実施している瀬戸谷地区に続いて、大洲、広幡地区において、「地区小中一貫教育推進計画」を策定し、今年度より小中一貫教育と合わせて、コミュニティ・スクールを開始している。

その他の地区についても、準備が整った地区から順次協議会を立ち上げ、西益津、葉梨、岡部、高洲地区で令和2年度からの小中一貫教育、併せてコミュニティ・スクール開始に向け準備を進めており、藤枝地区においても、本年9月に協議会を立ち上げ、地区推進計画策定に向け、議論を開始した。

また、小中一貫教育を推進する1つの柱として、小中学校の学習指導のつながりを明確にし、9年間の学びの質を高めるために、平成29年度に作成した9年間の指導計画である「藤枝市小中一貫教育カリキュラム」の活用により、市内全小中学校で小中9年間を見通した一貫性のある学習指導を展開した。

【施策6 国際感覚を伴った英語運用能力の育成について】

令和2年度からの新学習指導要領の移行に対応するため、ALTを3名増員し、小学校3、4年生で外国語活動を開始した。

また、平成26年度から藤枝小、藤枝中では、ペンリス市ランディロ小、楊州市チョヤン中とスカイプを利用した英語による児童生徒同士の異文化交流を定期的に行っているほか、平成30年度には新たに広幡中学校とオーストラリアのペンリスセレクトィブハイスクールが協定を結び、交流をスタートして、国際理解と友好を深めた。

今年度も引き続き、ALTを必要数確保し、全小中学校で日本人教諭とティームティーチングを行うとともに、海外姉妹都市とのスカイプを活用した異文化交流の拡大や、ALTを活用した英語課外授業として「Fujieda English Camp」の開催など、藤枝らしい特色ある英語教育を推進していく。

【施策8 確かな学力の育成と環境整備について】

教育の情報化ビジョンに基づき、「ICTを効果的に活用した分かりやすく深まる授業の実現」や「子どもたちの情報活用能力の育成」を行うため、「藤枝市教育ICT化整備計画」を1年前倒しして、タブレットパソコンや電子黒板、書画カメラなどのICT機器を、全ての小中学校に導入した。

今後も引き続き、教員が電子黒板やタブレットパソコン等の機器及びソフトウェアを授業の中で、効果的に活用できるように、ICT支援員による手厚い支援や研修を行っていく。

また、学校の多忙化解消に向けた業務改善への取組の一環として、市がめざす部活動のあり方を示すため、「藤枝市部活動の基本方針」を策定しました。部活動の意義や基本視点のほか、「平日は週3日以内、上限2時間」、「土・日はどちらか1日、上限4時間と

する」など、活動日、活動時間、休養日などを定めている。併せて、これらの基本方針についてまとめたリーフレットを作成・配布し、地域の方や保護者に周知するとともに、本基本方針に沿った適切な活動を推進した。

さらに、部活動の顧問を補助する「外部指導者」39名を中学校9校に配置して活用し、幅広い部活動の機会の提供と専門的な技術や技能を身につけた指導者による質の高い指導の機会の提供を充実させた。

平成30年度には、部活動の顧問となり、大会引率等も単独で行うことができる「部活動指導員」3名を3校へ試験的に配置しました。今年度は、部活動指導員を増員し、6校にて6名の部活動指導員を活用していく。

その他、教員の働き方改革リーフレットの作成、教師の勤務時間の上限に関する方針の策定など、教員が子どもと向き合う時間を確保し、教育の質を高めるとともに、教員自身も自らの働き方を見直す意識改革を図っていく。

【施策11 特別支援教育の充実について】

近年増加している特別な支援が必要な児童生徒が、個に応じたきめ細かな支援を受けながら学べる環境を整備するため、葉梨西北小学校に新たに特別支援学級を新設したほか、青島北中学校に情緒の学級を新設するなど、小学校11校、中学校8校に特別支援学級を設置し適正就学を推進した。

また、特別支援教育に造詣が深い「特別支援教育士」の資格を有する人材を「特別支援教育アドバイザー」として教育委員会内に配置し、特別な支援を必要としている子どもや保護者への支援体制の見直しを図った。

具体的には、本年度から、障害の有無や通常学級・特別支援学級の枠にとらわれず、子ども一人ひとりのニーズや学校の実態に柔軟に対応するため、学校支援相談員と特別支援学級支援員による支援体制を一元化し、特別支援学級の全学級および通常学級に「特別支援教育支援員」を配置するとともに、就学支援の相談窓口の新たな開設、発達通級指導教室の増設、中学生のための支援教室「する一ぱす」の全校設置など、「特別支援教育アドバイザー」が中心となって新しい支援体制のもと特別支援教育の更なる充実を図っていく。

併せて、新しい支援体制の周知啓発及び保護者の不安軽減を図るため、「藤枝市特別支援教育リーフレット」を作成するとともに、4月に、新たな取り組みとして、「藤枝市特別支援教育リーフレット」を活用して、保護者や園の関係者などを対象にした「藤枝市特別支援教育説明会」を開催した。

【目標Ⅲについて】

目標Ⅲ「だれでもどこでも学び合う環境を整備します」ということで、世代を超えた学びを支援する事業について記載されている。

【施策16 生涯学習・スポーツの振興について】

人材養成講座において、出前講座や人づくり藤枝塾を開催し、生涯学習を通して地域で活躍できる人材の発掘、育成を図った。

今年度、新たな取組として、「地域で活躍する人材育成研修会」を開催し、地域住民の知識や技能を活かし、地域や学校で活躍するボランティアの育成に繋げている。

以上、行動計画の平成30年度実績、令和元年度の事業計画の説明とさせていただきます。

続いて、今年度4月に行われた全国学力学習状況調査の結果を報告する。

【今年度の全国学力学習状況調査の結果について】

まず、小学校では、小学校6年生が本年度この学力調査をやったが、国語、算数、この2教科について、いずれも国、県の平均正答率を上回る結果が出ている。

また、中学校3年生の結果について、中学校では、国語、数学、それから本年度初めて英語の調査を行った。この3教科、いずれについても、国、県の平均正答率を上回る結果が出ている。

本市の子どもたちの学力調査で見る学力については、ここ数年良好な結果が続いている。成果と課題ということでまとめてあるが、全体見て、小中学校ともに、国語の「話すこと・聞くこと」については、全国、県平均を大きく上回っており、「ふじえだ型授業モデル」に基づき、小中を通じて話し合いで問題を解決する授業を日常的、継続的に行ってきた成果であると捉えている。

また、中学校の英語「聞くこと」の領域では、身近な学校生活や家庭生活といった話題について、必要な情報や話の概要を聞き取ることができていた。これは、小学生の時から、英語の音声に慣れ親しみながら基本的な表現を身につけてきた成果であると考えられる。また、本市は積極的にALTを学校に配置しているが、英語によるALTとのコミュニケーションを中心に授業を進めてきているので、そういったことがこの結果につながっていると考えられる。

一方で、国語の「言語に関すること」では、「漢字を文の中で正しく使うこと」や文法の問題等に課題が見られた。

また、全体的に、文章を読んで考えを形成すること、文章の内容を読み取り、根拠を明確にして書くこと、具体的な解決策を書くことに課題も見られ、目的や意図に応じて、自分の考えの理由を明確にして書く力をつける必要がある。

今年度の全国学力学習状況調査の結果については、以上となる。

本日の会議では、行動計画の施策実践を踏まえ、本市教育についての現状の検証を行い、今後の施策の効果的な展開を考える上で皆様のご意見をいただきたい。

事前に配布した資料3「会議においてご意見をいただきたいこと」に記載してある、『ALTを擁した「充実した英語教育」』や『一人ひとりのニーズや学校の実態に柔軟に対応した「きめ細やかな特別支援教育」』をはじめとする、現在、本市が注力している主要施策について、また、第5次藤枝市総合計画が来年度に計画終了を向かえ、新たなグランドデザインの策定に向け動き出していく中で、10年、20年、さらにその先を見据え、本市の教育の目指す姿、方向性についても委員の皆様の専門的な視点で、大所高所からご意見をいただきたい。

委員長	<p>今、事務局から、詳しく説明していただいた。送られてきた資料を読んでもたら、すごい量で、十分いろいろたくさんやっていて、大変だっただろうと思った。真面目に、一生懸命ここにあるとおりに実施されているという印象である。これから、いつものとおり皆さんから今日の説明資料に関わらず、次の段階に反映できるものがあれば違った角度からでも結構なので、いろいろなご意見をいただきたい。</p>
団体代表	<p>まず、「新たなグランドデザインの設定に向けて、10年、20年、さらにはその先を見据え」といった視点でやられているというのはとても良いことだと思うが、最近の時代の流れは異常なほど早いと私たちの会議の中でもよく言われていて、ある意味、原点回帰がひとつ大事になってくるのではないかと。10年前には全く想像しないような状態になっている。それこそ、ICTを活用した授業は10年前は考えもしなかったと思う。ということは、10年後になると無駄になるわけではないが、流動的に動けるように、あまり長期すぎずに、中期ぐらいの計画があったら良いというイメージがある。長期的なビジョンに縛られて動いていくというのは、足を引っ張ってしまうようなイメージがある。</p> <p>私も、上の子どもが小学校1年生になったばかりで、算数を学んでいるが、やはり小学校に入る前から、学研や公文などに通わせて、基礎的なところを教えているので何とかついていけているという話を嫁から聞いている。しかし、保育園に通われているお子さんは、そういうところに通ってないということになると、1年生の段階では、まず座ってられない、授業になじめないということで、先ほど言われた格差が少し生まれてきている感じもする。今、藤枝市がやっている施策に対しての意見ではないが、全体的に見て、若者代表ということで、少し意見を述べさせていただいた。</p>
学校関係者	<p>特別支援教育を長くやってきているので、そこを中心に見せていただいた。特別支援教育が平成19年に始まった段階で、一番大きく言われたのが、子どもたちに対して、いろいろなところでネットワークを作ってやっていかななくてはいけないということである。施策の中でも、教育委員会だけでなく、子ども発達支援センターや子ども家庭課などと一緒にやっているということは、特別支援教育を確実にネットワークを広げながらやっていると感じる。交流圏の関係で、藤枝市のモデル校といわれる居住地校の小学校、中学校に、特別支援学校に通っている子どもが行って、地域の子もたちと教育を行うことを長く取り組んでいる。先日、小学校に行ったときに、特別支援学級に通っている子どもが地域の小学校に行き、何の抵抗もなく声をかけてもらったり、あいさつをしている姿を見ていると、私としては、これからの共生社会を作っていく上での基盤づくりのところに藤枝市が関わってくださっていると感じた。その中で、親が足踏みをしているところもあって、本当に行って大丈夫なのかと考えたりすると聞く。地域のサポーターズクラブやコーディネーターの方が小学校に入っていくような形になっている。もしできたら、そういう方たちが特別支援学校に来ている子どもたちが学校に来たときに、少し顔を合わせ、地域の中で声をかけていただくと、地域へ子どもたちが出やすくなる、あるいは、つながりをもっていけると思った。まだ、なかなか資料を読み込めていないので、どういう方がそういう役割になるのか、地域学校協働活動推進員かコーディネーターの方か分からないが、交流に行ったときに、その方たちに声をかけていただいて、地域でも声かけができていけばさらに良い形になっていくと感じた。</p>
学識経験者	<p>先ほど説明していただいた内容は、前回の話でも出てきたところで、いろいろ教えて</p>

	<p>いただきたいことがある。例えば、地域と学校をつなぐコーディネーターを配置するという話があったが、いろいろな地域でゆくゆくコミュニティ・スクール化するときコーディネーターの位置づけが非常に難しいところだが、このコーディネーターは学校の中の人材ではなく、地域の人材からコーディネーターは選出されているのか。どういう方を選んできたのか教えていただきたい。それから、それに併せたコミュニティ・スクール化を図るときに、この学校運営協議会ができれば、コミュニティ・スクール化されたと一般的には認識するが、その目的やどのようにそれを活用するのか。例えば、地域の人材を学校に入れていくときにその特色を地域の人が考えて行うのか、学校が要望するのか、研修会など何かの指針を設けてやられると思うが、そのあたりを今後どのようにしていくつもりなのかお聞きしたいというのが大きく分けるとまず1点目。</p> <p>全部で3点あり、2点目は、部活動のあり方と教員の多忙化の話である。先ほどあまり長期的な視野だとどうかという話をしたばかりだが、藤枝市として10年、20年先、部活動をどういう方向性にするとお考えになっているか。少し視野として持っていた方が良いのではないかと思っている。例えば、愛知県は、小学校で部活をやっていたが、来年はやめる。広島は夏の中体連をなくすと今年度決まった。部活動は基本的には外に出すという方向にいくのかと思う。そうすると、部活動の外部指導員を増やして外で部活をやっていくのか、それとも、地域スポーツクラブの育成支援、生涯スポーツの推進とあるが、クラブをしっかり育てて、そこで子どもたちを活動させるよう切り替えていくのか。本当に考えなければならぬところになってくる。例えば、外部指導員にお願いするにしても、タダとはいかないので、その予算をどのようにやりくりしていくのか。1つ提案だが、クラブを運営するのに、企業などを巻き込みスポンサーという形で、企業を回ってお金を集めて、そこから人材を輩出するのはどうか。今後、どちらにシフトするのか分からないが、近々ではなくゆくゆくは、そういうことも考えていく必要がある。教員の多忙化で、いろいろ工夫されて、だいぶブラックではない感じを受けるが、仕事の内容自体は本当に減っているのか。例えば、持ち帰りで減っているのか。何か切れるものがあつたら、切っていくということは今後実施されていくのか気になっている。</p> <p>最後3点目は、特別支援教育について、特別支援教育支援員の人事は基本的には県にあって、県で予算を確保していると聞いたことがある。藤枝で特別支援教育支援員を配置したり、中学校の全校に通級指導教室を設置する場合の人材にあてる費用は市でまかなわなければならないのか、県とのやりくりでできるのか。やはりどうしてもお金のことがかかってきて、やりたいことができないということがあるので、そのあたりについて少し教えていただきたいのと、今後そこは考えていかなければならないことだと感じている。</p>
事務局	<p>1点目の質問であるコーディネーターについては、今現在、学校サポーターズクラブでコーディネーターを中心に、例えば植木の植栽などをやっただけではない。小中一貫教育を進めている中で、地域の方が学校のことに、ほぼボランティアとして協力していただいている。小中一貫教育を進めている中で、同時にコミュニティ・スクール化を進めているが、コミュニティ・スクールの一番の良い所は、地域の方や学校、保護者、この3者が協働して子どもたちを育てるということである。今まで、お祭りや防災訓練など、地域が学校にお願いしたいことを、地域が直接学校にお願いしていたと思</p>

	<p>う。また、学校が地域にお願いしたいこともあったと思う。コミュニティ・スクール化することで、そこにコミュニティ・スクールディレクターを1人配置する。先ほど、コミュニティ・スクールディレクターとはどういった方かとお質問があったが、基本的には学校と地域をつなぐパイプ役の役割をするので、学校の先生だった方や地域に長くいらっしゃる方であり、主に地域の中で、学校等をうまくつないでくれる方である。そういった方が、学校の言うことを地域に伝える、学校の子どもたちにこういうものに参加してもらいたいなどの地域の要望について学校へと繋げる役なので、両方をうまく調整してくれる方を選んでいる。基本的には地域に根付いた方で、学校のことも今までやってきてくれたサポーターズクラブの方でなってもらっしゃる方もいる。基本的にはそういった方を人選している。先ほど、コミュニティ・スクールの話をしたが、学校運営協議会を設置することで、コミュニティ・スクールができるので、学校運営協議会では、地域の方、学校の校長先生、PTAの方、コミュニティ・スクールディレクターが集まり、子どもたちに何をするのか、地域で何をするのか、いろいろな話をする。この行事については参加できる、吹奏楽の子どもたちを呼びたい、中学の子どもたちを呼びたいなど、子どもたちが地域でやれることがないか、地域が学校のことでやれることはないかを話し合いながら、この事業を進めていくということである。これが学校運営協議会の趣旨である。</p> <p>部活動のことだが、現在、藤枝市の部活動の進め方については、部活動の基本方針に基づいて、各中学校で取り組んでいる。この基本方針を作るにあたって、藤枝市は部活動検討委員会を市で設置し、いろいろな関係者に集まってもらい、この基本方針を作った。検討委員会は現在も進行中で、今後の部活動のあり方についても検討委員会でさらに協議を進めていきたい。基本的な方向としては、社会、クラブの方へできるだけ、流れていくような方向ではあると思う。部活動指導員の予算については、国の方で3分の1、県の方で3分の1、市で3分の1ということになっている。教員の多忙化は実際にどうなのかということについては、なかなか状況は進んではいないかもしれないが、教員の働き方に対する意識は変わってきていると思っている。それから、特別支援教育のことについて、支援員については、県の方からも特別支援教育非常勤講師ということで派遣していただいている。それは県の予算である。市の方では、特別支援教育支援員を72名本年度配置しているが、これは市の予算でやっている。</p>
市民	<p>この会議については、前回、前々回ととても良い内容で、これについては特に言うことはないが、私の方で地球温暖化のことについて話をしたい。今、小中学校では、地球温暖化についての勉強はされているのか。</p>
事務局	<p>環境問題に関わってくると思うが、多くの学校で今、総合的な学習の時間で環境を扱った学習を取り入れている。そういったところで、この地球温暖化に関して、子どもたちが考える学習が展開されている。また、理科の授業や普段の学校生活の中で、できるだけごみを出さないであったり、節電などについての指導も行われている。</p>
市民	<p>今、地球温暖化ということで、10年ほど前から言われるようになったが、今年の台風21号による甚大なる被害をこのあたりでも受けて、私もやめてしまおうかと思うぐらい被害を受けた。何十年もやっているが、過去にそんな被害があったことは当然なかった。近年の台風の急激なる発達や、地球温暖化による海水温の上昇に伴い、見る見るうちに</p>

	<p>低気圧が大きくなるという状況が最近続いていて、ついこの間も千葉に上陸した。最大瞬間風速が、通常だと 40 メートルぐらいだったら耐えられるように設計しているとのことだったが、今小学校、中学校の体育館なども非難場所になっていることを考えると、地球温暖化をもっと子どもたちに、私たち大人もそうだが、一人ひとりができることをもう少し学んでほしい。例えば、先ほどの節電やごみ問題など、おそらく簡単に考えている。小さいときから徹底してやり、一人ひとりの意識が変われば、もう少し良くなるのではないかと思うので、そのあたりの教育というものを一歩中に入れてやっていただきたい。</p>
<p>学識経験者</p>	<p>私もこの会議に最初から関わらせていただいて、私たちの意見が大変反映されていると思う。それから、プログラミング教育や英語教育など、国の方からいろいろなものがどんどん入って、先生方を見ると手一杯でないかと思う。例えば、創造力、問題解決力の育成を見ても、JAXAの連携やICTなど、十分いろいろあって、それで創造力や問題解決力の育成が本当にできるのか。要するに、それらは、専門家から指導を受けて学んでいる。前にも言ったが、一番大事なことは、問題解決能力は、親や先生から自立する年代、小学校中学年くらいから、自立して自分たちでいろいろなことをやりだす。それが今は、ほとんどできなくなっている。先生や専門家から、その場でそういうことを得ても、問題解決能力が得られるのかどうか。今、中学や高校野球では、すべて監督が口を出さずに、選手自身に考えさせて、野球、陸上スポーツなど選手自らが考えるということをやっている。やはり、子どももこれからますます詰めこまざるを得なくなるのは間違いないが、その中で、そういう子どもが自ら考える遊びやフィールドを、施策の中にプレイパーク事業があると思うが、確保してやってもらいたい。そこで自然に子どもの中にリーダーが誕生して自分たちで考えていくということをやってほしい。それがこういう問題解決能力の育成に一番大事なこと。それが一番足りなのではないか。また、先ほども出たが、先生の多忙化で、本当に先生の腹の中はどうか、アンケート調査など国からの雑務が本当に減っているのかなどをしっかりと確かめないといけない。雑務をできるだけ排除して、先生には、直接子どもと向き合うことができるような体制を整えてほしい。</p>
<p>事務局</p>	<p>確かにそうであると思っている。問題解決能力は、自分も子どものころを振り返ると、異年齢の子どもの中の、地域の中で育ててもらったという思いもある。そういう環境がなかなか作れず、自分たちでやるようにいってもなかなかできない部分がある。例えばプレイパークもそうだが、そういう場所をとりあえず与えるという感覚でやっている。その機会を与えると、そこに来た子どもたちが仲間になってやっていく。それを繰り返すことによってその子どもたちも育っていくのではと期待する。そういうことが自分の地域でできてくれば良いと思うが、なかなか夏場は外で遊んでいられないくらいの気温になっているので、そういった意味でも生活環境がかなり変わっている部分もあるが、そういうことを期待しながらやっていきたい。もう1つ、多忙化の話の中で、特に高校生くらいになるとスポーツの部分において自分たちで考えながらという話をいただいたが、本市の高洲中学校においては、県の指定を受けてやっていて、部活動についても中心にやってきた。その中で、子どもたちを中心に子どもたちが考えて部活動をやるという体制を高洲中学校では確立しつつある。週2日間は部活動をやらないので全体の時間</p>

	<p>数は減っているが、成績が落ちたのかというと例年に比べ上に上がるくらいになっている。学校自体が、そして子どもたちが活性化しているという話を聞いているので、その状況が市内の学校のほうにも行き渡っていくと良いと考えている。</p>
<p>学校関係者</p>	<p>子どもたちをお預かりしている学校現場の立場で、お話しさせていただく。環境面についてである。まず、学習環境の整備では、大変良くしていただいている。一昨年に導入していただいたICT環境、これは子どもたちの学習理解に本当に役立っている。私も毎日教室を回っているが、若い先生から、そしてベテランの、退職間際の先生まで、毎時間とは言わないが、使わない日はない。子どもたちが集中して学習をしている。また、支援員も派遣してくださるので、効果的な活用についても勉強しているところである。ALTの配置については、先ほどお話にあったが、大変厚く配置していただいて、子どもたちが生の英語に触れて、外国人と話すことに抵抗が少なくなっていると感じる。また、エアコンを導入していただいた。私の学校では7月26日まで授業があった。8月も28日に再開したが、例年と違って子どもたちは涼しい環境の中で学習ができて本当に違う。例年だとぐったりしてるような状況だが、今年は設置をしていただいてありがたかったと思う。感謝申し上げます。体育館のスポットクーラーについても同様である。エアコンについては、可能なら音楽室等の特別教室にも設置していただくと、大変ありがたい。計画をさらに進めていただきたい。というのは、音楽室は、防音の関係で片側が壁になっているところが多い。両側が窓でないので、風が通らない。多人数で使用するとかなり苦しい状況になるので、そういうところにも進めていただきたい。また、安心安全な学校環境というところでもいろいろ進めていただいている、自治会や警察とも連携して子どもたちの見守りが進んでいる。防犯カメラも設置していただいて、ありがたいと思っている。ただ防犯カメラについては、1箇所のみを設置だったので、焼津では、複数台の設置をしたという新聞記事を見たが、学校は出入り口が何箇所もあるので、1台でも一定の抑止力があるのは確かだが、さらに安心安全を守るためには、複数台のカメラが設置されると良いと思う。これについても計画の更なる前進を期待している。</p> <p>最後に、多忙化については、皆さんに関心を持っていただいてありがたく、私も現場を預かっていて、この2年半で校内で40を超える方法で多忙化解消に関する対策をしてきたが、これ以上何をしたら良いのかというぐらい頑張ってきたつもりである。でも、解消されているかという、まだまだの状況があり、遅くまで働いている職員もいる。今後さまざまところと連携して、出張が削減されたり、報告文書をなくしていただいたり等進めていただきながら、そこを進められたらと思う。</p>
<p>学識経験者</p>	<p>本当にかゆいところに手がとどく事業展開と、目標達成率の高さだと思い聞かせていただいた。学力調査の結果についての報告では、本当に画期的なことで、先生方頑張ったなと思って聞かせていただいた。1つだけ、今の話にも繋がるが、教員の働き方改革について最近思うことだが、マスコミや世間で教職員はブラック、大変というイメージが語られる。私は、藤枝市では少なくとも教職はブラック、大変というイメージで教職を語ることはやめたい。そうはされていないと思うが、それはやめたいと思う。やはり先生方には、教職という仕事が、いかにやりがいや喜びを味わえる仕事であるのかということを実感していただきたい。確かに不登校やいじめ、軽度発達障害、先ほど話のあった家庭の教育力の低下、本当に問題が多く、生徒指導上、特別支援上のそういう</p>

	<p>問題が、先生方を随分だめにさせている。でも大変なのは、そこにかかる手間暇や時間以上に、精神的なストレスである。人間対人間であるので。働き方改革で一番効果的なのは、精神的ストレスを軽減することだと思う。市では、地域のサポート力を強化して下さったり、専門家を入れるなどの手当てをして下さって、学校はとても助かっていると思うが、一番大事なことは先生方が力をつけていくことだと思う。問題が起こってから後手に対応するから大変になってしまう。そういう問題が起こらない学級作り、学校づくりを積極的に行っていくことがすごく大事ではないか。先ほど、先生が子どもと向き合う時間について話があったが、どの子にとっても居場所があり、しっとりと落ち着いた教育では、不登校もいじめも起こりにくい、それから発達障害のある子もいつの間にか落ち着いて過ごせるようになるものだと思う。また、家庭が大変な子ども学校にくると楽しい、ほっとするという、そういう場になると思う。今若い先生がどんどん増えているので、学級経営の力量を磨くことによって、精神的ストレスも仕事量も軽減することができるというプライドを各種研修会の折にぜひ育ててほしい。それが、授業で人を育てる、生徒指導を機能させるということを大事にしてきた、藤枝市の特色ある働き方改革になっていくのではないかと思う。</p>
<p>団体代表</p>	<p>NPO で子ども家庭課と一緒に子ども学習支援、第3の子どもの居場所ということでやらせていただいている事業がある。先ほどお話があったが、貧困や家庭の教育力の低下など、教育格差が大きな問題になっていると思う。やはり、それでは不登校やいろいろな家庭の事情にどうしても目がいってしまう。10年後、20年後、先に先に行くのも良いが、そういう子たちも活かされるように、そうしたら地域で子育て、地域ぐるみでということが大事になってくる。ICTなど、いろいろなことが活気付いている中で、やはり怖いと思うのが格差だと感じた。</p>
<p>学識経験者</p>	<p>いろいろ施策を展開してくださっていて、本当に素晴らしいと思った。施策の中に、「学校・交流センターを核に一体となって取り組む教育の推進」とあるので、私の希望としては、ぜひ交流センターを活用して地域学校協働活動推進事業や放課後児童クラブ、コミュニティ・スクールなど進めてほしい。学校を核というのは大事だが、学校と交流センターがコラボして、大人も子どもも学びあえるような環境を作ってほしい。テレビで保育園と老人ホームが一緒になった最初の事例が出ていて、高齢者の方と子どもたちがいろいろな形で交流する。それは高齢者の方もとても嬉しく、子どももとても楽しい。昭和50年代後半からされているところだったが、子どもも大人を見て、こういう風に生きていこうと思うし、おじいちゃんおばあちゃんも子どもを見ると活力をもらえる。そういう中でお互いが、何か刺激をし合ってきていける場が作れると人生100年時代にも対応できていけるのではないかと思う。先ほどお話にあったが、たくさんある事業を何とかして繋げて、細かく言えば減らないかもしれないが、数としては、繋がることで全体としては減っていく。何でもしたら良くなるのではなく、引き算みたいな発想もあって良いのではないか。今テレビ小説では、昭和の戦後の大変なときから、立ち上がっていく女性の姿をやっているが、あの人たちが生きてきた環境はひどかったと思う。なのに、アニメを作ったり、今度は焼き物を作りそう。私の父も言うが、ないから頑張ったという。私も子どもが2人いるが、上の子が大学4年で今度就職。大学は希望のところにいけなかった。いけなかったので、彼は彼なりに頑張って、就職は自分の</p>

	<p>ベストをつくして、一番いきたいところにいけるようになった。彼にとって、そのときはとても落ちこんで大変だったが、良くなかったことが良くなった。私の娘も私が今そんなにいろいろなこととしてあげられているかどうかというと、運命共同体みたいにお互いに助けあって生きているような状態だが、彼女を見ているとちゃんとしてくれている、助かっているのも、何もしないのが反対に良いのかと思う。何でもしてあげると良くなるわけではなく、何にもできないところから良くなることもあると思うので、引き算みたいな考え方もあって、いろいろなものを繋げていくのも良いのではないかと感じた。</p>
団体代表	<p>部活動はなかなか大変だという話が出ていて、学校体育から社会体育という動きになっている。社会体育にすると、ここに参加しなくなってしまうのではないかと危惧する。頭も鍛えつつ、小学校中学校くらいの年代で体も鍛える、ぶつかってコミュニケーションをとる、そういうところがスポーツの良いところだと思う。縦の異年代の交流の話が出たが、核家族化になっていて、最近はおじいさんおばあさん、おじさんおばさんの怖いげんこつがない。そうすると、権利ばかり主張して、義務を果たさない。言いづらいことだが、弱者を非常に拾い上げる、フォローしている価値観だと、なおさらそういう人たちが、それを当然だと、権利として考えてくる。その裏側にあるものは何かというところがマスコミも言いづらい部分である。将来大変だなと感じている。拾い上げていかなければならないところも当然あるが、その裏側を考えなければならぬ。また、学力調査の結果を聞いて、先生方、子どもたちが頑張っていると感じた。キャリア教育などで、自分が学んでいることの先が、目標や夢とどのように繋がっているのか、今の学びは将来の何かに繋がっていくと明瞭にイメージさせることによって、今の学びをより良いものにするのではないかとと思うので、上の年代や先輩など、いろいろなことをやってきている方の話を子どもたちに聞かせてあげていてもらいたい。</p>
学識経験者	<p>私からは、ICTと学校関係、エアコン、グローバル化について。難しい話ではなく、9月に私のところの学生が教育実習でまずは青島北小学校に研究授業をやらせていただくことがあった。午前中は藤枝で、午後は浜松に行った。そのときに、やはり研究授業で教育実習生が電子黒板を使って授業をやっていた。ある程度効果的な活用の仕方をしていて、普通のホワイトボードと電子黒板、その他いろいろな資料との組み合わせで、もう少し電子黒板の使い方を工夫したら、もっと良くなると思った。それから、ICTの支援員の方からの援助もきっとあると思うが、今後もっとゆるく活用できたら良いと感じた。そのときに9月で暑かったが、エアコンはついてなかった。後から実習生に聞いたら、エアコンはあるという。なぜつけていなかったのかと思ったが、やはり何度以内と定めた指針があると分かった。おそらく28度いってなかったと思う。30年に学校環境衛生基準が変わり、17度から28度の間で教室の環境を整えることになったが、教室の中で熱中症になる子はほとんどいない。一番多いのは、体育館や外のいろいろ。体育館等のクーラー、扇風機の方がより先で、有用だと思う。そこが一番大きいところである。また、浜松の小学校では、大きな液晶パネルの大型テレビを活用していたが、パソコンとの接続がたまたまその時うまくいかなくて使えなかった。電子機器というのは、そういう失敗があるので、簡単なことだが、それを見越した形での副案も考えておかなければいけないと感じた。向こうもエアコンは設置してあるが、ついていなかった。もう1つ、一番重要なのが、浜松の南区の小学校は、全体の4分の1が外国人</p>

	<p>児童である。32人の学級のうち、8人が外国人。それもいわゆるメキシコ、フィリピン、ブラジルだけでなく、被り物かぶった中東の子どもや見るからに白い肌の子どもだった。小学校の時から、外国の方と一緒に授業を受けていて、それなりのグローバルな接し方、そういったことが浜松はできていると思った。ただし、英語はほとんど使っていないとのことだった。</p>
市民	<p>私からは2つお話ししたい。1つは、学校運営協議会、コミュニティ・スクール。もう1つは、似たようなものだが、サポーターズクラブ。この二つについて、意見、感想を述べたい。まず全体として、この報告書は、最初に委員長がおっしゃったように、ものすごい量で、これを作るのはすごく大変だったのではないかと驚いた。それでは、まずは、学校運営協議会、コミュニティ・スクールというところだが、それこそ大昔は、特に田舎の方へ行くと、学校は文化の入り口、導入口、接点だった。都会に行っても、大学や高校は文化の入り口であり、学校というのは社会の中で非常に重要な立場にあった。学校運営協議会、コミュニティ・スクールが、瀬戸谷、大洲、広幡で始まっていて、実際にやってみたら、学校運営協議会、コミュニティ・スクールがとても大切なことだと分かった。まず、子どもが学校へ通っている家庭以外の家庭では、小学生、中学生が何をやっているか分からないということがある。学校運営協議会で、学校の中の小学生、中学生の様子をもりこんでお便りを作り発行することによって、地域全体が小中学校及び小中学生の動きを知ることができるようになる。それを通して、地域と学校教育が、現在うまくいっているということではないが、これから自ずと連携していけるようになる。そういう大きな核になっていけると感じた。この中で重要なことは、今までそういったコミュニケーションというのは相互になかった。例えば、世の中の事例で言えば、お便り。単なる印刷物だが、それを読んでいただくことにより、様子が分かってくる。それが1つの柱になってくる。そこで、1つお願いだが、お便りを印刷するときにお金が多少いる。手当てがあると良い。</p> <p>もう1つ。サポーターズクラブに関して、サポーターズクラブの位置づけだが、地域の方からの単なるお手伝いなのか、先生の教育代わりであるのか。授業の中で先生が少し手薄になったときに生徒を見ることもある。サポーターズクラブの位置づけや役割が、聞くところによると、地域や学校によってだいぶ違うと聞いている。そういった点で、学校の中でコンセンサスがあるのかどうかというところ。学校運営協議会もそうだが、事務局や校長先生は熱心にやっていただけるが、その他の教職員の方は理解していただいているのかどうか、そこがこれからの課題だと感じた。サポーターズクラブのことについて、内容をもう少し揃えたほうがよい。実績をみると地域差がすごく、特に広幡を見ると1回しかない。これが良く分からず、活動の揃え方が違う気がする。コミュニティ・スクール、学校運営協議会はこれからの活動によって非常に大きな力になる。特に地域には大学や高校の先生、校長先生あがりの方もいらっしゃる。会社、例えば、自営でコピーライターをやっていて、非常にすぐれた文章能力の方など、力をもっている方が大勢いる。そういった方たちの力を活用して、学校と地域が、一体となってやり、大人も成長する。そういった方向になっていけたら良いと思う。</p>
市民	<p>この会議で、理学療法士として体のことを教育の中で伝えていくということで、学校で姿勢についての講義や障害児の方の姿勢の指導など、体のことで困っているお子さん</p>

	<p>へのアドバイスでしか関わっていないので、システムや教育の指針は理解しきれず、この内容に関しての意見はなかなか申し上げられないが、親として保護者と話しているときに感じるのは、先生に対する批判や批評が噂話として多い。求めるものが高く、30人40人を相手に1人ひとりの子どもに、そこまではできないだろうということをおっしゃっている親が多い。やはり学歴重視、良い学校に行くところと良いところに就職ができる、立派な大人になれるという固定概念がある。今の世の中はそういうものでなくなってきている。企業が求めているものはそうではないが、まだそう思っていて、塾に通わせて、9時、10時まで、送り迎えをしている親御さんもいる。また、夫婦間の方向性がずれていて、旦那さんの悪口を言う。資料の中の目標に「0歳からのスタート」とあるので、もう少しそういうことが固まってしまう前の、妊娠期や産後の、これから子どもを育てていく、まっさらでフレッシュなお母さんになるスタート時点で、子どもに身につけてほしい力や大人としてどのようにやっていくのが良いというところの教育をしたら良いのではないかと。小学校に上がって親の教育、家庭教育学級で積極的にやってくださる、私も参加したが、小学校では遅いこともあるので、産前、産後から行っていく。例えば、フィンランドのネウボラなど、島田では始まっていて、そのフィンランドの原型とは違う形でやっているようだが、助産師や専門家が一人ひとりのお母さんについて、お母さんにも教育をするということが、ただの子育てだけでなくお母さん自体の生き方を教育していく。お母さんが結局子どものお手本になるため、藤枝市でできていくと良いと思う。産前、産後のお母さんのメンテナンスについて仕事で関わることが多く、子どもの体のことや育っていく環境によって人格が決まってしまうなど大事なところなので、もしかしたら、この課で言うことではなく児童課でお話することかもしれないが、そこをやる問題児発生がもう少し減るのではないかとと思う。</p>
事務局	<p>昨年、その前からもこの会議に出させていただいていて、いつも思うことだが、私たちは行政マンとして視野が狭すぎるのではとつくづく感じた。その中で今日頑張った良かったと感じたのは、コミュニティ・スクールはやはり重要だと、やっていただいて半年過ぎたところでそれを実感していただいたというのは、大変嬉しく、コミュニティ・スクールを進めて良いのだと心強く思った。他の委員の方から話のあった、高齢者と子どもが一緒に福祉施設は全国でもあちこちにできてきている。私の昔からの持論だが、学校というのは、やはり地域のコミュニティの核である。そこで地域は大きくなったと思う。また、今現在も小学校、中学校中心にそこになければならない、存在しなければいけないとお願いしていると思う。子どもの数が段々減っていく現状もあるので、学校の方で空きがあれば、教室1つ、2つを地域に開放し、ご高齢の方、ご高齢の方だけでなく20代、30代の方など誰が来ても良く、子どもたちも休み時間や放課後に行くことで地域が活性化するのではないかと。そのような学校の使い方も模索していく必要があると思う。これは私の持論で、なかなか実現できないが、そういう形ができていけば、もっと地域と学校、あるいは地域の方々が全体でさらに地域を盛り上げていくようになるのではないかと。そこが教育や福祉、子育ても含めて、一緒になってできる一番良い方法だと思っている。実現できたら良いと心の中で思っている。今日もたくさんいろいろな幅広い意見をいただいた。いただいたご意見を計画や今後、総合計画も来年立てていくので、その中で活かしていければと思う。</p>

事務局	本年度1回しかない会議だが、本日をもって終了となる。皆様からたくさんの貴重な意見をいただき、今後の施策等に活かしていきたい。本日のご協議に感謝申し上げます。
-----	--